

## 第十二回 AJフォーラム（研究会）

### 社会的経済開発のもとでのケララにおける生活様式の変容

日程：2007年12月15日(土)

場所：国土舘大学世田谷校舎 中央図書館AVホール

講師：島岡光一（埼玉大学名誉教授）

#### 1. はじめに

インドの南部であるケララ州には、ノーベル経済学賞を取ったオックスフォード大学のアマルティア・センという先生がきっかけで興味を持ちました。といっても私は、必ずしも彼の論理が最高であると思っているわけではありません。けれどもケララは、彼が自分の経済学のモデルとしてとりあげたことで、世界の開発学、社会学、人間学、経済学などのさまざまな学会において有名になりました。その「ケララモデル」に沿ってお話をします。

#### 2. ケララの概要

ケララは、GDPや住民一人当たりの収入は低いのですが、高い識字率と就学率の高さを誇っています。そして死亡率、とくに乳児死亡率が低いのです。これはつまり衛生の程度が高いことを示しています。また、学校施設が充実しています。経済が発達すれば、豊かになって、教育、衛生施設ができて、長生きする、というのがふつうの考え方です。だけど、「ケララモデル」というのはそれに当てはまらないケースなのです。このモデルは、識字率や幼児死亡率、平均余命といったせまい指標だけで判断するとすばらしいものに見えますが、それではケララにおけるかなりの貧困を解決していない。それが私の課題です。

まずは人口問題ですが、ケララでは1971年を境にして人口成長率が急激に減っています。人口が減ったというわけではなく、人口成長率が減っているのです。人口性比においては女性が多い。インド全体の統計とは反対です。出生率は減っていますが、同時に幼児死亡率を含めた死亡率も減っています。こうしたことから衛生状況が良いことがあらためて窺えます。ケララの教育水準は高く、識字率は90%から95%、女性でも90%あります。ケララはとても貧乏なのですが、こうした状況は悪くない。どうしてなのかを調べました。

#### 3. ケララにおける生活の現状

第一次産業が圧倒的に多いケララにおいて、社会の基礎をきめるのは農村の生活様式でしょう。その特徴ですが、私が博士号を持つ女性の友人に連れて行っていただいたのは、たまたま村でも最上層部の家でした。その階層の家はコンクリートの二階建てで半エーカーから1エーカーの果物の実る庭があります。屋敷には玄関ドアがあり、窓にはガラスがついている。これがこの社会では珍しいのです。水は外の井戸から電気ポンプで吸い上げています。台所は大理石張りの西洋式のものと伝統的な石敷のものがあります。石の台所は、旧い金持ちのシンボルなのでわざわざ残しているの

です。ケララの家系は母系性で、連れて行ってもらった知り合いの家には兄弟が四人いますが、全員家を出ていて、彼女が跡継ぎ娘です。今は家を出ていても、彼女は将来必ずここに帰ってくるようになっていきます。

真ん中くらいの家は、レンガやタイルの壁で漆喰塗りです。大部分の村人はこのくらいのレベルで暮らしています。窓にはガラスがないことが多く、井戸は電気の汲み上げタイプではなく、水はバケツで汲んでいる。最下層になると木造の家に住んでいます。電気もないところがありました。ケララには厳然としたカーストが存在しますが、そのカーストにも入らない不可触賤民の部落はさらに貧しい。モンスーンがきたら家が持ち去られてしまうようなところです。ちゃんとした便所もない。住民は泥の上にヤシのマットを敷いて座っています。生活を支えているのは運河や水脈で、それにくっついて生きているのです。

ケララの食事を見ますと、ブラフマンはベジタリアンですが、ほかのカーストは肉も食べます。種類はさまざまですが、労働者は米ばかり食べることはできず、イモなど根菜類を取っているようです。インドといえばカレーと思われがちですが、ぜいたく品です。お客様にはカレーを出しますが自分たちはあまり食べません。たんぱく質源は魚が一番多い。その次が牛、そしてヤギ、ウサギ。カエルも食べます。最近は食糧供給地がケララでなくなってきたこともあって、現地の人たちはとても質素な食事をしているようです。

#### 4. ケララ変化のきっかけ

ケララにおける最大の改革は耕地改革でした。日本でも1947年から2年から3年くらい占領軍の強大な権力の下、農地改革が執行されています。ケララでは、とくに第二次世界大戦中に米不足になってますます貧乏になったこともあり、1956年までにかなりの程度農地改革に近いものが行われていました。大地主がもっていた土地を州が没収し、それをいわゆる小作農家に五エーカーずつ分けたのです。それでもケララでは零細と言える広さですが。農地は、耕作していた農民に分配し、残った土地は、土地を耕す権利さえなかった不可触賤民に渡しました。したがって全員が土地持ちの農民になったのです。これでケララは万々歳になったかということ、そうではなかった。この制度は、時間が経つにつれて徐々に形骸化していったのです。日本では、土地を安く買えた農民たちは一生懸命働いた。それで生産高がものすごくあがりました。ところがケララではそうはいかなかった。不可触賤民は働くという感覚が薄く、土地をもてあましたのです。

また、ケララでは徹底的な教育改革が行われ、それによって増えた知識階級は農業を嫌がりました。できれば土地を手放すか貸すかということをしたい。「耕作者に土地を」という農地改革の精神の形骸化です。一部の人々は秘密裏に土地を小作に出すようになりました。地主—小作という関係はなくなったはずなのに、実質上は続いているのです。かつてのケララにおける地主—小作関係ですが、掘っ立て小屋に住む不可触賤民が小作人だとしたら、そこから追い出されたらそれは死を意味していました。現在は、近代的な契約関係社会になっていますが、ひそかに行われているので契約書が存在しません。ですから契約違反はしょっちゅう起こる。けれども昔のようなすさまじい関係ではありません。そういう意味では、建前と現実とのねじれてはいますが近代化していると言えます。

## 5. 変化がもたらした変化

土地を手放した知識階級、とくに若い年代の人々は出稼ぎに行くようになりました。労働力。それがケララ最大の輸出品です。出稼ぎというとマイナスのイメージがあるかもしれませんが、ケララとしてはそれを誇っているのです。行く先で一番多いのは中東ですが、ケララ人は教養があり、英語ができる。いわば輸出品の品質がいい。そうするとそこで売れるわけです。雇いやすいのです。ケララにおける州外からのGDPは一貫して増えていて、所得全体の20数%もあるのです。つまり、いかに教育産業がすごいかということです。その送金で何をするかというと、日本人なら投資でもして殖やすのですが、ケララの人々は家や土地を買うのです。一番高いタイプのものを買うのが夢で、その一部は叶えられている。それがケララの社会変動なのです。つまり、形骸化した農地改革によって余剰人口が生じ、教養を身につけた人々は外で金を稼いで、親に大地主が住んでいたような家を買ってやる。そういう社会変動があったのです。しかしそれは、生産的な循環ではなかった。

最近、湾岸戦争の影響によって出稼ぎに行った人が帰ってきています。そうすると失業人口が増える。ケララの失業率というのは非常に高く、一番高いのが20代で、とくに女性の失業率は60%台です。識字率については女性は男性と肩を並べているのに、失業率となると男性は30%と下がります。高学歴失業者もやはり女性が高い。このような境遇から抜け出すには嫁に行くしかないのですが、そうするには日本の金銭感覚でいうならば300万円ほどの持参金が必要です。失業者の女性たちがそんなお金をどのようにして稼ぐのでしょうか。ケララの高い自殺率はその帰結ではないでしょうか。だいたい女性というのは自殺しないんです。女は命をはぐくむ性です。でもケララの女性は死ぬ。なんとも哀れです。

## 6. まとめ

このように見てみると、「ケララモデル」なんてないんです。こんなにひどいモデルなんてない。モデルという言葉には理想的なイメージがあります。「ケララモデル」という言葉を使うと開発の理想形とも考えられそうですが、断じてそうじゃない。非生産的なお金の使い方をして、それが高い自殺率に結びつく。そのなかに、私は理想的なものを全く見ません。

しかしながら、ケララらしい、といえばケララらしい。祖国を誇りに思い、伝統的な文化を守っている。やたらと教養が高い。人情にも厚い。ケララらしさ、高度な社会的達成のもとで、反面、経済的未達成とそれが持つ悩みや苦しみ、それをケララの女性が一身に背負っている。その女性がどのように解放されていくか。それを見ていきたいです。